

「使う題材」づくりに挑戦して

～生徒用椅子の製作～

<教材のねらい>

- ・作ったものに自信を持たせ、使える体験をさせる。
- ・滋賀県の資源を活用する。
- ・使うからこそ体験できる愛着を感じる。

1. 作品を持って帰らない生徒たち

「先生、作品を持って帰らなくていいですか？家で使うことないし。」

ものづくりにこだわり、家で使える技術を身につけてもらいたいと願いつつ、毎年、使えるものを作ろうと教材を工夫しながら授業に取り組んでいる。しかし、このきついひと言を発して、手作りの味わいある作品をゴミと化してしまう生徒が多くなった。

生徒達のまわりには安くて、便利なものがあふれている。そのなかで、デコボコとした形の悪い手作りのものなど、魅力を感じなくなっているのだろうか。

何としても作ったものを使ってもらいたい。自分で作ったものには、味わいがあるのだと感じてもらいたい。そういう思いで、作れるものや、使えるものではなく、「生徒が必ず使うもの」を作ろうと考えた。

2. 題材「椅子」への取り組み

生徒が毎日使うものといっても、なかなかしっくりといくものがなく、どうしようかと考えていたところ、教材を入れていただいている業者の方から、「椅子はどうでしょうか？」とアドバイスをいただいた。

教材カタログなどをめくってみると、椅子の教材は沢山ある。しかし、小さなもの（椅子の形をした小物置きのようなもの）であったり、毎日、使わないもの（レジャー用の椅子）であったりしたため、目的にそぐわない。それならば、いっそのこと、学校の生徒用椅子を全て、手作りで仕上げたらどうだろうと取り組みを始めた。

生徒用の椅子であれば、必ず使う上、作品そのものが大きいものなので見栄えも、やり遂げた思いも大きくなる。

早速、業者の方や知り合いの大工さんに協力をいただき、取り組みを始めた。

椅子を作るにあたって、

- ・生徒が製作後、卒業するまでの耐久性があること
- ・滋賀県産の材料をできるだけたくさん使うこと

この2点に重きを置いて製作にかかった。

3. 「椅子」の製作

取り組んだ題材「椅子」の特徴は

- ・部品数…18点
- ・滋賀県産材と国産材の材料
- ・ほぞ組、釘接合、ネジ接合などの組み方で丈夫な構造
- ・ほぞ穴の加工、一部の部材を除いて、寸法通りの切り出しをした材料を使用。
- ・対象は1年生とした。

生徒に見本を見せたところ「でかい！」「持って帰れるの？」との声があがった。「最終的には持って帰ってもらいますが、せっかく作ったものを使わないのはもったいないので、できるだけ学校で使ってもらいます」と説明に付け加えると、「自分が作ったものが使えるのかな」という反応が多く返ってきた。



教材「椅子」

4. 製作をしてみても

製作に取り組んで感じた、二つの問題点を付記しておく。

一つ目は材料費である。ものづくりに取り組む際、その教材費がかかる。「いいものは高い」と言っても、そこは中学生の教材。あまり高いものでは困る。「滋賀県の木で滋賀県の生徒を育てたい」という思いもあり、業者に無理を言って、できるだけ滋賀県産材でお願いしてあるが、費用面ではかなり高くつく。外国産材に置き換えるとそれなりに費用は抑えられるそうだが、せめて国産材でと言って納入していただいているのが現状である。国産の木材市場はみなさんがご存じの通りの状況なので、国産にこだわるか、コストを抑えるか費用面の選択を迫られる。

二つ目は、座り心地の問題である。

本校では、スチール製の椅子が教室で使われている。座板の部分はカーブもつけられて座り心地が工夫され

ている。しかし、座面に隙間のある今回の椅子は、見た目ほど座り心地はよくないようで、「作品を持って帰るので、今までの椅子（スチール製のもの）を使いたい」という生徒もたくさんでできた。座面には隙間を作らないなどの工夫が今後必要となった。

がたつきも座り心地を悪くする原因の一つ。板をかますなど少し工夫すれば解消できるものであっても、この一手間が、生徒達にとってとても大変なようで、それならば持って帰るのは大きくて重くても、最初からある椅子を使おうというようになっているようである。

5. ものを大切に作る生徒に

作品を返却する際に、学校（教室）で使うようにながしているが、昨年度、製作した生徒の半数以上が作品を持って帰った。今回の製作の趣旨に反し、「自分が作ったものは不安」という生徒が多くいた。自分で作ったものが使えるのだと知ってもらいたかったのだが、今後の製作の中で、使っている生徒がどんどん増えて、本校では、「自分で作った椅子を教室で使うのが当たり前」となるようになっていきたいと思います。

ものづくりを通して、技術とともに「ものを大切に心」も育ててもらいたい。作ったものを使い、大切に作るから、愛着もわく。愛着がわかればもっと大切にできる。そんなプラス思考の循環に入っていければと、今年も椅子作りに挑戦する。